

西会津町奥川地区 奥川中町集落 調査報告書

2018年度福島県大学生等による地域創生推進事業



2019年2月28日
福島大学行政政策学類
社会計画論演習
岩崎由美子研究室

目次

序章 調査の目的と概要	(板橋実花)	
第1節 調査の目的		2
第2節 調査の概要		2
第3節 調査の内容		3
第1章 西会津町の概況	(門脇優真)	
		11
第2章 奥川地区・中町集落の概況	(柴田雄登)	
		16
第3章 中町集落住民聞き取り調査の結果と考察	(釘丸昌美)	
第1節 住民聞き取り調査の概要		23
第2節 住民聞き取り調査結果		24
第3節 住民聞き取り調査のまとめと考察		33
第4章 西会津町奥川中町地区の住民意識 ―聞き取り調査結果から―	(国分麻里奈・伊藤千尋・菱事奈央)	
第1節 農業経営		34
第2節 集落の役割と課題について		39
第3節 奥川地区中町集落住民聞き取り調査の結果と考察		42
第4節 まとめ・考察		45
第5章 まとめと考察	(白井綾乃 遊佐善智恵)	
第1節 全体を通じて		47
第2節 活性化の方向性について		49
第3節 おわりに		54
第6章 フィールドワークの感想		55

序章 調査の目的と概要

第一節 調査の目的

少子高齢化による人口減少の影響を受け、過疎地域にある集落では高齢化、若者の都市部への流出が一層深刻化している。

そんな少子高齢化と人口減少の著しい地区に大学生が入ることによってその町にどのような影響があるのか、地域の活性化のためにどんな活動ができるのか、集落がより良い方向に進むにはどうしたらいいのかを調査するために、今回調査に協力していただいたのは福島県西会津町奥川地区である。

西会津町奥川地区は高齢化、後継者不足による農業の維持問題、空き家の問題など多くの問題を抱えている。私たち大学生は、実際にこの地域に入り、地域の方々に話を聞き、地域の方々と活動を行い、この地域を活性化させる取り組みは何なのかを考えるために、フィールドワークを行った。

第二節 調査の概要

西会津町奥川地区で調査を行うのは今回が初めてなので、調査は戸別聞き取り調査のほか、集落の行事に参加するなどのフィールドワークを行った。

戸別聞き取り調査には19件の住民の方々にご協力いただき、一戸に大学生が4～5人程度付き、集会所でお話を伺った。一戸当たり90分程度で行ったが、皆さん積極的にお話ししてくださったことと、西会津での調査は初めてということで調査項目の多さから時間を上回ることも多かった。

フィールドワークでは西会津町奥川地区が今後地域活性化のために行う予定の地域を散策するツアーや、すでに行われている祭りやイベントにモニターとして参加した。

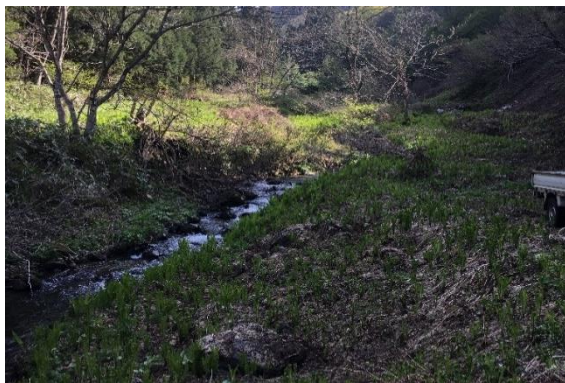
モニターとして大学生が参加したのは、奥川地区にもともとあるものを生かし、その時に感じたこと、改善したほうがいいと思ったことや良いと思ったことを現地の方と共有し、よりよいものにし、今後の活動や地域活性化に役立ててもらうためである。実際に現地の方や外部からイベントに参加した方々と触れ合うことで、現地の方や外部の方がこの地区やイベントをどう思っているかを直接聞くことができた。

第三節 活動の内容

2018年4月28日～4月29日 カタクリ群生地見学・人足

これが西会津奥川地区での初めてのフィールドワーク調査であり、現地の方との初顔合わせとなった。

一日目はカタクリという花の群生地が西会津にあるということで、カタクリ祭りのお手伝いと、カタクリの群生地やその周辺の自然を紹介していただき、案内をしてもらった。そのあとは西会津の奥川地区を中心に歩き、奥川地区以外のいろいろな地区や、それぞれの地区のいいところ、問題になっているところ(空き家など)を案内していただいた。



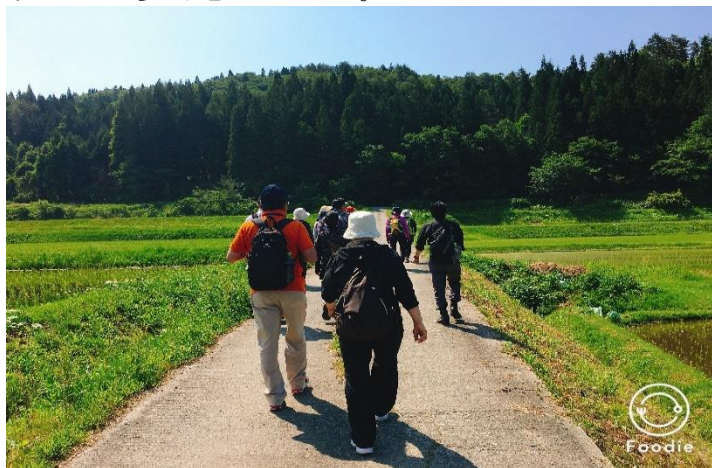
二日目は「人足」と呼ばれる現地の地域資源管理活動に参加させていただいた。今回の人足は田んぼに水を引くための水路の堰上げの手伝いを行った。堰上げは大学生でも体力を使うような作業で、これを住民の方々だけでやるのは大変だからこそ大学生の力が必要なのだと感じた。さらに人足には住民の方が多く参加する行事なので、率直な意見や話を聞くことができた。

6月2日～6月3日 七観音ツアー

一日目はオープンしたばかりのゲストハウス「ひととき」に宿泊体験をした。この「ひととき」は西会津町の地域おこし協力隊の佐々木祐子さんと夫の雄介さんが営んでいるもので、西会津に来た観光客や外人の方などが泊まれるように空き家を自分たちで改装したものである。西会津の空き家問題は深刻で、とても多くの空き家がある。それを活用した宿は空き家問題の解決につながると感じた。



二日目は西会津町の奥川地域にある七つの観音を回り、観音様のお堂でその観音様がどうしてこの場所に建てられたかなどのお話を聞き、御朱印をもらうという七観音ツアーに参加した。これは過去にも何度か開催されているもので、この日も県内外から多くの方が参加していた。毎年参加されているリピーターの方や、歩きなれているような方が多く感じられた。



6月30日～7月1日 農都交流モニターツアー奥川さんぽ・西会津町の若手職員との交流会

一日目は奥川で農家民宿を営んでいる片岡元次さんに奥川の中を案内していただいた。元次さんが自ら開拓した広場や、子供たちの遊び場になっているという川などを紹介していただいた。その日の夜は、西会津町の若手職員の方々とバーベキューを行った。普段なかなか話す機会のない若手職員の方とバーベキューを通して、どうして西会津の職員になったのか、普段どんな仕事をしているのかなどを聞くことができた。



二日目は、一日目にもお世話になった片岡元次さん、奥川地区の集落支援員の岩橋義平さん、米寿米というブランド米を作っている三瓶純一さんの三人にご協力いただき、交流会を行った。交流会では三名の方が奥川に対してどのような感情や思いがあるのか、これからの奥川を活性化させていくためにどのような活動を行っていけばいいのかを学生とともに話し合った。その中で出た、「空き家をリフォームして、西会津に来たボランティアの方々などの拠点にしたい」という意見が採用され、実行に移っている。意見交換は新たなアイデアを生むのに有効だなと感じた。



8月14日 奥川盆踊り

西会津町奥川地区の盆踊りに参加し、そこに出品するかき氷の屋台の手伝いをを行った。

盆踊りには孫・親・祖父母の三世代が集まっていたということもあり、若者がとても多く集まっていたことが印象的だった。盆踊りを覚えている人も多く、子供から大人までみんな踊ることができていた。盆踊りは生歌・生演奏であったことも印象的だった。



8月18日 極入大聖歓喜天

西会津町極入地区のお祭りに参加し、この日は岩魚焼きの屋台の手伝いをを行った。

「たかおあんちゃ」という岩名焼きの名人の方に焼き方を教わった。このときの参拝客は120人ほどで、岩魚焼きのほか、そばや野菜の販売や甘酒が無料で振る舞われた。



9月9日～9月13日 西会津聞き取り調査

戸別聞き取り調査を奥川地区中町集落で行った。一戸につき学生が4～5人程度付き、お話を聞きながらもメモを取ることに集中してしまわないよう多めの人数で聞き取りを行った。さらに初めての調査ということもあり、質問項目が多めであったこと、一軒一軒に時間をかけた調査を行うという目的もあったため、日にちを分けて調査を行った。今回聞き取りを行えたのは19戸であったが、何戸か来ていただけなかったところもあったため、今回聞き取り調査に参加していただけなかった方に参加していただけるようになるにはどうしたらよいのか、考える必要があるなと感じた。



10月20～10月21日 空き家片付け

7月1日に行った奥川地区の方との交流会の際、学生の中から出た「空き家をリフォームして、西会津に来たボランティアの方々などの拠点にしたい」という意見が採用され、一日目は拠点となる空き家の片づけを行った。



二日目は、以前にもお世話になった西会津町の地域おこし協力隊佐々木さん夫婦が経営しているゲストハウス「ひととき」で行われていたカフェ&バーのイベントに参加し、西会津の方や、チラシなどを見て参加した西会津以外からの方々と話をするなど、交流をした。



11月2日～11月4日 奥川新そばまつり

2日から4日にわたり、奥川地区で新そばの収穫を祝い、住民やそのほかの方々にそばを振る舞うイベントが開催され、その運営や設営などの手伝いに参加した。

毎年来てくれる人も多かったが、バイクで通りかかった人など、県内外からも多くの方が参加した。

ふるさとまつりという別のお祭りとの開催日が被ってしまったこともあり、去年よりも来場者が少ないという懸念もあったが、予想を上回るほどの大盛況となった。



11月17日～11月18日 西会津人足

この人足では空き家の整理が主な活動となった。空き家内の家具の整理や移動、捨てる食器の処理などを主に行い、空き家に人が泊まれるようにする準備を進めた。

空き家の片づけ以外にも、今後の西会津についてのことや、大学生たちの近況などを話し合った。



(文責 板橋実花)

第1章 西会津町の概況

1. 西会津町の位置と気候

西会津町は福島県の西北部耶麻郡に位置している。周囲は東に喜多方市及び会津坂下町、南に柳津町、金山町とそれぞれ接しており、北及び西は新潟県阿賀町と接している。西に越後山脈が走り、北には磐梯朝日国立公園の雄姿、万年雪を戴く飯豊連峰が間近に望まれ、中央に電源の宝庫、阿賀川が13の支流を集めて西に流れ、日本海に注いでいる。それに並行して、磐越自動車道、国道49号線と磐越西線が横断している。公共交通機関はJR磐越西線野沢駅または西会津ICも存在し、若松―野沢間の高速バスも運行されている。また、西会津町民バスも運行されており、2012(平成24)年から開始した利用者の予約に応じて集落とまちなかエリアを結ぶ「デマンドバス」と決まった時間にまちなかエリアを巡回する「まちなか循環線」、そして、野沢と会津坂下町を結ぶ「野沢坂下線」が存在する。ただし、10月1日からは一部定時定路線バスとなった。

村の面積は東西17.55km、南北34.50kmで、面積298.18km²である。そのうち約86%が山林になっている。福島県内の自治体の中では中間くらいの面積を持つ自治体である。

気候は日本海型に属しており、夏は高温多湿でありながら、朝晩涼しく過ごしやすいほか、高温期間が比較的短くなっている。冬季間は平均降雪期間が128日で、平均最深積雪量が142cmの雪深い里でもある。¹

<図表 1-1 西会津町の位置>



2. 人口

西会津町の人口の推移を見ると、徐々に人口が減少しており、1995(平成7)年からの20年間で約3200人程度が減少した。なお2018年(平成30)年10月1日現在、西会津町の人口は男性3081人、女性3301人で計6382人となっており、世帯数は2666世帯となっている。

¹ <福島県西会津町公式ホームページ>
<https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/site/kanko/3034.html> より

<図表 1-2 西会津町の人口推移>

年	1995年	2000年	2005年	2010年	2015年
人口	9845人	9075人	8237人	7366人	6582人

(統計局日本 「国勢調査」 より)

3. 文化

以下の内容は西会津町のホームページを参考にした。

西会津町は福島県の北西部、新潟県との境に位置し、越後から会津への人、物の交通の要衝として、古くは縄文土器の時代から、古文書によれば藩政時代には越後街道などが利用され、人の往来や廻米、塩、海産物などが各駅所と荷駄にかかわる人々に活気をもたらしていた。交通の要衝の地であったことは西会津の歴史文化の根底に影響を与えた。

1954(昭和29)年の町村合併により1町9ヶ村が西会津町としてスタートした頃、日本の高度経済成長期が始まり、全国の地方から若い労働力が都市部などへ流れ、農村も構造改善事業が進められ、農業の機械化により労働力を都市部へ提供してきた。同時に農村の近代化が推進されたが、一方で神仏に祈り、自然の摂理の中で育ててきた農村の営みを生活改善という名のもとに簡素化・統一化し、地域の特色ある自然とともにある暮らし、祈りとともにあるくらしまで簡略化してしまった。

一方、西会津町霊地信仰の里として知られており、大山祇神社や如法寺の鳥追観音、などが存在し、観光客も訪れる。他にも廃校になった校舎を創作活動・ギャラリー・地域文化の育成・グリーンツーリズムなどの拠点として活用した「西会津国際芸術村」や西会津のミネラル野菜などの地場産品がたくさん売られており、行ってみたい道の駅にも選ばれたことのある「道の駅にしあいづ 交流物産館よりっせ」も知られている。西会津町では、歴史との出会い「ふれあいの観光」風光明媚な自然と接する「目で見る観光」や山菜、手打ちそば、溪流魚、地酒など「食べる観光」を柱として、「観光」を用いた町づくりに取り組んでいるのも特徴のひとつである。

4. 産業

福島県の産業別就業人口(2017年国勢調査)では(図表1-3)、西会津町は第一次産業が19.0%、第二次産業が35.8%、第三次産業が45.3%であり、福島県(第一次産業6.7%、第二次産業30.6%、第三次産業60.0%)と比較すると、第一次産業が県の平均の約3倍近くという割合となっているのが特徴として見られる。また、製造業の就業者数が一番多いことが読み取れる。

<図表 1-3 西会津町の就業者数と主な産業就業者の割合>

就業者人口	農業 林業	建設業	製造業	卸売業 小売業	宿泊業 飲食サー ビス業	医療福祉	サービ ス業
3236人	19.00%	13.00%	22.70%	11.30%	3.80%	9.80%	4.10%

(2017年「国勢調査」より)

5. 農業

以下では主に 2015（平成 27）年農林業センサスのデータをもとに西会津町の農業について述べていきたい。

まず西会津町の農業就業人口は 778 人となっており、その中で農業を主な仕事としている「基幹的農業従事者」は 691 人である。福島県と比較してみると、男女比は大きな差はないが、そのうちの 65 歳以上の従事者については福島県の 67.8% に比べて、西会津町は 21.4% と大きく下回っていることが図表 1-4 から読み取れる。また、農業就業人口は 778 人に対して基幹的農業従事者は 691 人となっており、西会津町において農業に営む人のほとんどが農業を主な仕事にしているということが見て取れる。

<図表 1-4 基幹的農業従事者人口>

	基幹的農業従事者	男	女	うち 65 歳以上
西会津町	691 人 100%	367 人 53.2%	324 人 46.8%	148 人 21.4%
福島県	65076 人 100%	35713 人 54.8%	29363 人 45.1%	44143 人 67.8%

(2015 年農林業センサスより)

西会津町の経営耕地面積別経営体数をみると（図表 1-5）、0.5ha から 1.0ha の耕地面積を経営している割合が一番大きい。福島県と比較しても約 5 ポイント上回っており、0.3ha 未満の面積を経営している人は 0.1% と少ない。農産物販売額別経営体数（図表 1-6）からは 50 万円未満の販売額で経営を行っている割合が福島県の 32.4% に対し西会津町では 49.1% となっており、17 ポイントほど上回っている。他の割合を見ても、西会津町では大規模の農家は少ないとわかる。

また、販売目的で作付け（栽培）した作物の類別作付け（栽培）経営体数図表 1-7 によれば、実経営対数が 516 経営体に対し、496 経営体が「稲」を作付けしており、多くの農家が「稲」を作付けしていることがわかる。

さらに西会津町は農業に取り組む人たちに向けて、土壌診断の保護や機械購入金の補助などの様々な支援金、農作物への鳥獣の被害防止のための電気柵の設置の補助などの町からの支援を行っていたり²、人口減少による農業の担い手不足に向けて町担い手協議会が担い手の経営改善に資するため又は集落営農組織等が高度化を目指すための支援も行っている³。

このように西会津町は農業支援に向けて様々な取り組みを行っていることがわか

² <西会津町の農業者に向けての取り組み>

<https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/uploaded/attachment/699.pdf>

³ <農家の育成について>

<https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/soshiki/7/829.html>

る。

<図表 1-5 経営耕地面積別経営体数>

単位：経営体

	計	0.3ha 未満	0.3 ～ 0.5	0.5 ～ 1.0	1.0 ～ 1.5	1.5 ～ 2.0	2.0 ～ 3.0	3.0 ～ 5.0	5.0 ～ 10.0	10.0 ～ 20.0
福島県	53157	333 0.6%	7406 13.9%	15319 28.8%	9384 17.6%	6141 11.5%	6591 12.3%	4322 8.1%	2318 4.3%	710 1.3%
西会津	551	1 0.1%	116 21%	187 33.9%	79 14.3%	49 8.8%	44 7.9%	28 5.0%	34 6.1%	8 1.4%

(2015年農林業センサスより)

<図表 1-6 農産物販売額別経営体数>

単位：戸

	計	販売 なし	50万円 未満	50 ～ 100	100 ～ 200	200 ～ 300	300 ～ 500	500 ～ 700	700 ～ 1000	1000 ～
福島県	53157	6383 12.0%	17226 32.4%	8763 16.5%	7733 14.5%	3946 7.4%	3588 6.7%	1837 3.5%	1620 3.0%	2061 3.9%
西会津	551	47 8.5%	271 49.1%	93 16.8%	60 10.8%	27 4.9%	24 4.3%	14 2.5%	7 1.2%	8 1.4%

(2015年農林業センサスより)

<図表 1-7 販売目的で作付け(栽培)した作物の類別作付け経営対数>

単位：経営体

西会津	作付 経営体数	稲	麦類	雑穀	いも類	豆類	工芸農 作物	野菜 類	花き類	果樹 類
	516	496	-	111	42	42	3	125	2	15

(2015年農林業センサスより)

6. 集落支援

西会津町では2011(平成23)年に、高齢集落が多く存在する奥川地区の支所に集落支援の拠点を設置した。集落支援員1名、地域おこし協力隊1名の計2名が各集落の支援活動を行っている⁴。

⁴ <福島県西会津町集落支援だより>

主な活動としては高齢化が進んだ集落を訪問し、状況把握のための聞き取りをしたり、役場に提出する書類を預かったりなど集落と行政のつなぎ役となっている。また、地域で行われている行事の運営の手伝いなども行っており、高齢化が進んで共同作業や行事の運営が困難になっている地域に、私たち学生等がお手伝いとして参加できるような仕組みを作っている。私たち岩崎ゼミの学生がたびたび西会津町の行事にフィールドワークとして参加させていただけるのは、この集落支援の仕組みづくりのおかげであり、私たち学生と西会津町のつなぎ役にもなっているとと言える。

(文責 門脇優真)

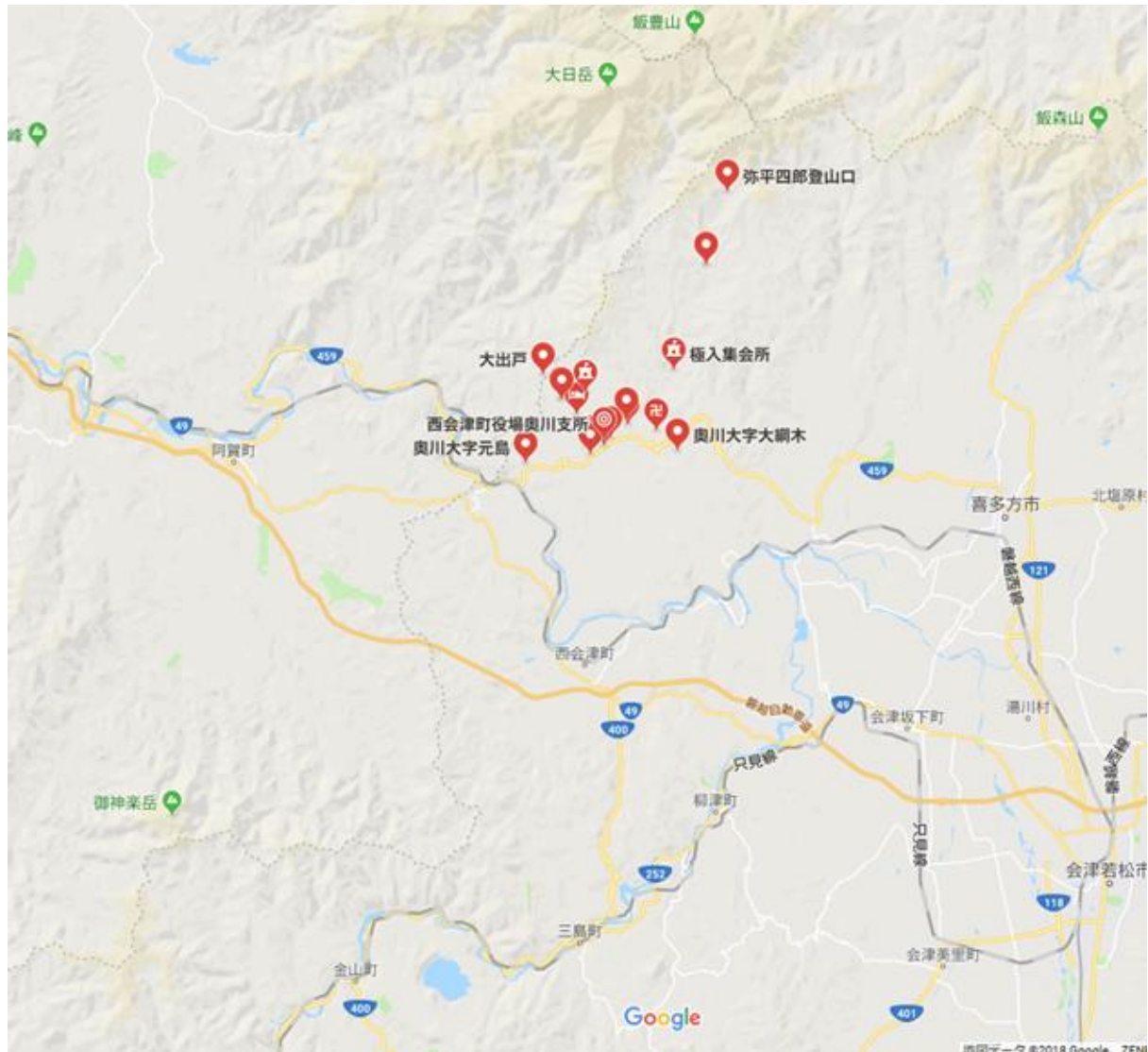
<https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/uploaded/attachment/2559.pdf>
<https://www.town.nishiaizu.fukushima.jp/uploaded/attachment/2060.pdf>

第2章 奥川地区・中町集落の概況

1. 奥川地区の位置

福島県耶麻郡西会津町奥川地区は、山形県、新潟県に跨る飯豊山（2105 米）の麓に位置する。阿賀川（図表 2-1）の支流沿いに広がるこの地区は、中山間地域としての形態をとっている。冬には、豪雪地帯としても知られている

図表 2-1 西会津村奥川地区地図



5

5 < Google map >

2. 人口

奥川地区の人口は2018（平成30）年4月1日現在で680人、男性327人、女性353人となっている。奥川地区は21からなる集落により形成されており、そのほとんどで高齢化率が50%を超えている（図表2-2）。

図表2-2 奥川地区の人口 2018（平成30）年4月1日現在

自治区	世帯数	人口	65歳≦	高齢化率
杉山	18	30	19	63.3%
向原	19	51	22	43.1%
塩	9	17	11	64.7%
新町	35	65	41	63.1%
道目	14	31	15	48.4%
下松	17	30	19	63.3%
山浦	18	37	25	67.6%
出戸	20	34	28	82.4%
中ノ沢	22	38	28	73.7%
松峯	10	21	11	52.4%
中町	24	40	26	65.0%
小山	17	33	21	63.6%
真ヶ沢	20	37	24	64.9%
宮野	12	28	11	39.3%
梨平	13	25	18	72.0%
小屋	8	16	13	81.3%
極入	25	53	34	64.2%
弥平四郎	17	23	19	82.6%
弥生	3	3	3	100%
小綱木	25	57	31	54.4%
大舟沢	8	11	8	72.7%
計	354	680	427	62.8%

（町役場資料より）

3. 奥川中町集落について

中町集落は奥川地区の中心部に位置しており、集落内には西会津町役場奥川支所も設置されている。世帯数は24戸、人口は40名、65歳以上の方が26名、高齢化率は65.0%となっている。家の周りには田畑が広がり、農業を営んでいる家庭も多い。

今回の聞き取り調査では奥川地区中町集落の住民の方々にご協力をいただいた。調査対象者は19人である。

年代世帯構成としては50代から80代が世帯主となるお宅が中心で、一人暮らし、夫婦二人、親子二人で生活しているケースが多く、就学者がいるお宅は極めて少なかった。また、職業としては、西会津町で働いている方が多く、役場・会社員・保育士などが目立った。そして、定年後は自宅の近くで農業（自給用）をしている方が多かった。

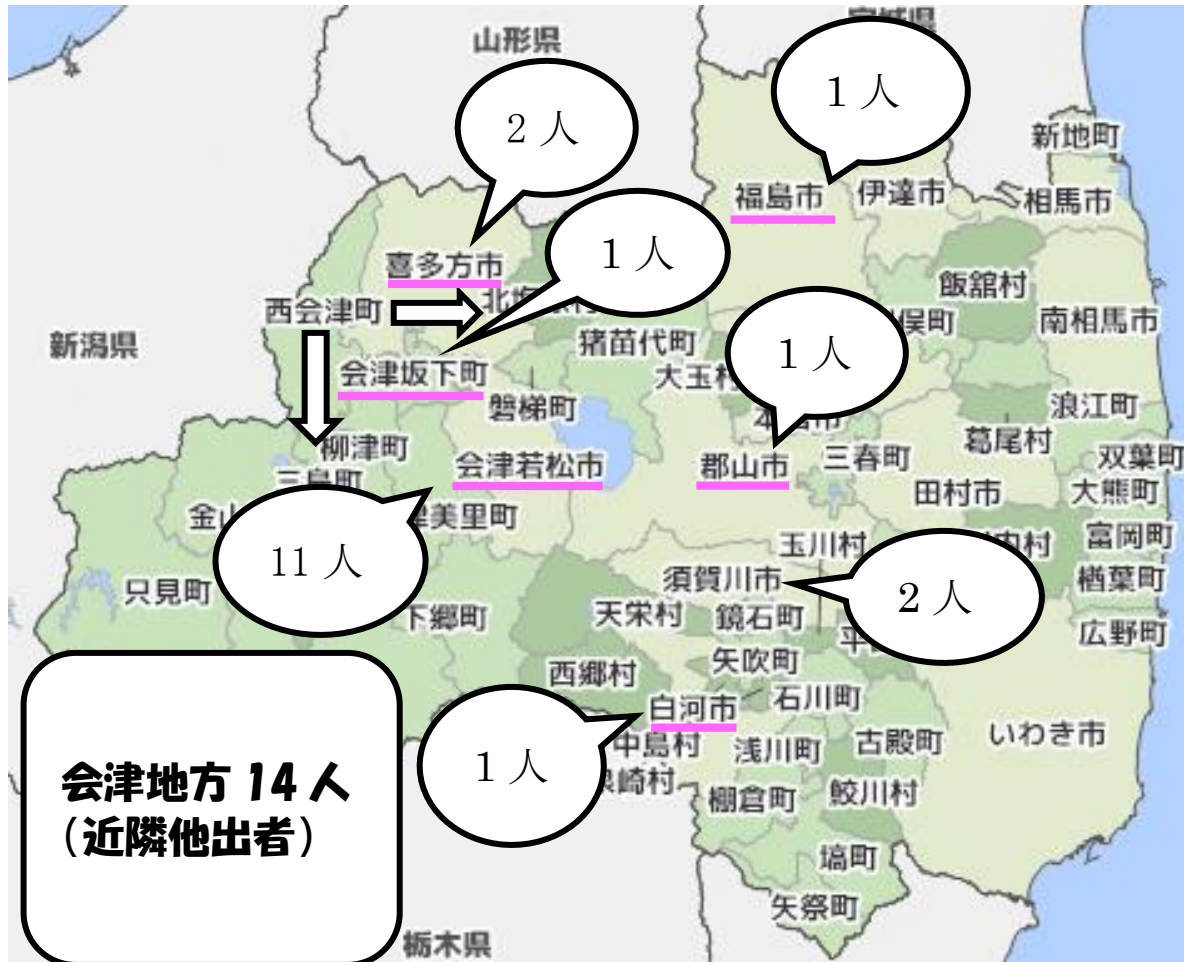
聞き取り調査により、後継者層の同居/他出の状況についてまとめたのが、下の図表2-3である（“後継者層”とは調査でお話を伺った回答者本人の息子娘世代（息子の妻や娘の夫も含む）とする）。同居/他出している後継者層の数は46人おり、同居が6人（男：3人 女：3人）他出が40人（男：19人 女：21人）という結果になった。

他出先としては（図表2-4）、男性の場合、会津若松市、喜多方市、須賀川市、東京都、埼玉県などが多かった。全体的に見ると県外の割合は少ないように見受けられた。女性の場合、西会津町、会津若松市、東京都、神奈川県などが多かった。また、他出先として挙げられた西会津町内の場合は、野沢（4人）、尾野本（1人）となっていた。

図表 2-3 後継者層の同居/他出の状況まとめ（2018年9月聞き取り調査）

	男性	女性	人数計
後継者層の人数	22人(45.8%)	24人(52.2%)	46人(100%)
うち他出者	19人(47.5%)	21人(52.5%)	40人(100%)
他出先	会津若松市6人 喜多方市2人 須賀川市2人 東京都2人 埼玉県2人 西会津町1人 郡山市1人 福島市1人 白河市1人 栃木県1人	西会津町5人 会津若松市5人 東京都3人 神奈川県2人 会津坂下町1人 仙台市1人 茨城県1人 埼玉県1人 千葉県1人 静岡県1人	

図表 2-4 中町集落 後継者層の県内における他出



4. 地区内の活動・行事

2018（平成 30）年度に中町集落で行われた事業は以下の「図表 2-1-4 中町集落 平成 30 年度事業計画」のとおりである。集落の環境保全のために行われるやクリーンアップ活動や花植えなども計画的に行われている。またそれに加えて、奥川七観音ウォーキングなど、中町集落の魅力を外部へ発信する事業の計画も進められている。

図表 2-5 中町集落 平成 30 年度事業計画

日程	内容
4/8	中町サロン 観音講 竹屋観音参拝
4/15	五ヶ村堰検分
4/28	山神社（伊豆・大山神社）春季祭礼
4/29	新田堰土砂上げ 人足
4/30	五ヶ村堰土砂上げ 人足

5/7	JA 米出荷予約打ち合わせ
5/13	田植え開始
5/31	猿追い払い講習会
6/1	中町観音堂掃除
6/2～4	早苗振休み
6/3	奥川七観音ウォーキング
6/10	集落内道路草刈り 景観づくりで路肩に花植え（マラソン大会に向けて）
6/11	中町サロン 観音講
6/17	第 43 回奥川健康マラソン大会協力
6/26	中町サロン ぶらサポ陽だまり食堂へ
6/30～7/1	農都交流協力
7/1	クリーンアップ作戦
7/22	新田堰草刈り 人足
7/29	五ヶ村堰草刈り 人足
8/4	集落全体会（福大生集落調査について）
8/16	地区体育祭種目説明・組み合わせ抽選会
8/19	集落全体会（福大生集落調査について岩崎教授の説明会）
8/24	中町サロン 地蔵講
8/28	町基本健診
9/2	第 50 回奥川地区体育祭参加 及び 慰労会
9/7	奥川新郷改良工事説明会
9/9～14	福大生 集落調査（聞き取り調査）
9/16	奥川地区敬老会
9/17	稲刈り始まる
10/6～21	水・土・里 重点事業
10/29	山神社（伊豆・大山）秋季祭礼
11 月	中町サロン 観音講
11/18	新田堰落ち葉上げ 人足
11/25	奥川地区交流ゲートボール大会参加予定
12/9	奥川地区カローリング大会参加予定

（中町集落資料）

地区の共同作業は「人足」と呼ばれ、原則として一軒につき 1 人に参加することになっている。山間部が多い中町集落では、人足として“堰上げ”と呼ばれる側溝にたまった枯葉を除去する作業が行われる。相当な力仕事だが、人足の参加者は高齢女性も多いのが特徴だ。高齢化の進む中町集落では、住民一人ひとりが自覚をもって共同作業に取り組む姿が見受けられた。

しかし、その人足の実施も深刻な高齢化・人口減少から困難になってきている。そこで中町集落では以下のような明確な目的をもって、福島大学の学生など若者の力を

人足に取り込もうとしている。

「町内の多くの集落で過疎高齢化によって集落の機能・環境保全のための人足（集落での共同作業）の実施が困難になっている。そこで、集落における負担の軽減と継続的な集落の機能保全を図るため、人足支援を外部から募る、人呼び制度化に向けて試験的に実施する。

また、集落支援活動をしに奥川に訪れた参加者向けに空き家を活用した拠点の整備を始めておりその整備にも参加してもらおう。」

（「集落支援 人足イベント実施要項」より）

5. 集落支援員・地域おこし協力隊について

西会津町では 2011（平成 23）年より奥川地区に集落支援員を配置しており、集落支援員として岩橋義平さん、地域おこし協力隊として小林拓也さんの 2 名が、町内の各集落を回りながら集落活動の支援を行っている。

地域における行事の支援として、かたくり鑑賞会や奥川七観音ウォークなど、地域の資源を有効活用し、奥川の魅力を精力的に発信している。また、我々、岩崎ゼミも行事のお手伝いやモニターツアーに参加させていただいている。最近では、空き家を外部からのボランティア拠点にしようと片付け作業に奮闘している。地域住民と外部の人間である大学生をつなぐ架け橋的存在をお二人は担ってくださっている。



【2018年6月30日～7月1日の農都交流の際に手伝わせてもらった草刈り】



【2018年11月18日 新田堰落ち葉上げ 人足】

(文責 柴田雄登)

第3章 中町集落住民聞き取り調査の結果と考察

第1節 住民聞き取り調査の概要

私たちは中町集落での日常の暮らしや農業、今後の集落の活性化についての考えを伺う聞き取り調査を行った。結果として19世帯(20名男性 8名女性 12名)の方から聞き取りを行うことが出来た。

聞き取り調査項目概要

- (1) 中町集落で生活している方に関する質問 (問1～問6)
(質問内容；性別、年齢、職業、家族構成、収入、健康に関して)

- (2) 集落での農業に関する質問 (問7～問9)
(質問内容；農業従事、今後の農業について)

- (3) 集落での現在の生活に関する質問 (問10～問12)
(質問内容；普段の交通手段、暮らしで困っていること、良いところ)

- (4) 今後の集落での生活に関する質問 (問13～問15)
(質問内容；今後も住みたいか、移住者に対して思うこと)

- (5) 集落の活性化に関する質問 (問16～問17)
(質問内容；集落の課題、今後取り組むべきことについて)

第2節 住民聞き取り調査結果

(1) 回答者のプロフィールについて

問1 性別

男性 40%、女性 60%で、若干女性の方が多という結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	男	8	40%
2	女	12	60%
	計	20	100%

問2 年齢

50代～80代の方が多く、約半数が80代という結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	19歳以下	0	0%
2	20～29歳	0	0%
3	30～39歳	1	5%
4	40～49歳	0	0%
5	50～59歳	2	10%
6	60～69歳	3	15%
7	70～79歳	5	25%
8	80～89歳	9	45%
9	90歳以上	0	0%
	計	20	100%

問3 職業

「農業」という回答が全体の 50%を占める結果となった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	農業	10	50%
2	会社員	1	5%
3	公務員	1	5%
4	自営業	3	15%
5	パート	1	5%
6	専業主婦	0	0%
7	無職	1	5%
8	その他	1	5%
9	不明	2	10%
	計	20	100%

問4 家族構成

「一人暮らし」が全体の 55%と最多であり、次いで「夫婦のみ」が全体の 30%となった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	一人暮らし	11	55%
2	夫婦のみ	6	30%
3	二世帯同居（親と子ども）	2	10%
4	三世帯同居（親と	1	5%
5	兄弟姉妹と同居	0	0%
6	その他	0	0%
7	不明	0	0%
	計	20	100%

問5 主な収入(複数回答あり)

「年金」という回答が全体の約 4 割を占める結果となった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	農業収入	7	25%
2	賃金	6	21%
3	仕送り	0	0%
4	年金	10	36%
5	その他	2	7%
6	不明	3	11%
	計	28	100%

問6 健康状態や、通院手段

「通院している」という回答が全体の 80%という結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	通院している（自力で）	10	50%
2	通院している（家族に連れて	4	20%
3	通院している（公共交通機関）	2	10%
4	健康	4	20%
5	その他	0	0%
6	不明	0	0%
	計	20	100%

(2) 農業経営・経営農地の承継について

問7 農業従事について（農業従事者のみ）（複数回答あり）

「余暇の楽しみとして」「自家消費分として」という回答が約6割という結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	生計を立てるため	1	6%
2	生計の一部を助けるため	1	6%
3	余暇の楽しみ、健康づくりのため	7	41%
4	自家消費分を作るため	4	24%
5	荒らさないよう仕方なく	2	12%
6	その他	2	12%
	計	17	100%

問8 5年後の営農の見通しについて（農業従事者のみ）

「現在のままである」という回答が最多の62%という結果になった。
 その他の意見には「5年後まで考えられない」「体が元気ならやりたい」という回答があった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	全面委託・貸付をしたい	2	15%
2	秋作業のみ委託したい	0	0%
3	春作業のみ委託したい	0	0%
4	受託・借入により規模を拡大したい	0	0%
5	集落営農により共同化に進みたい	0	0%
6	現在のままである	8	62%
7	その他	3	23%
	計	13	100%

問9 今後農業が不可能となった時、農地をどうするか
 （農業従事者のみ）（複数回答あり）

「荒らしてしまう」「農地の貸付・委託」という回答が多い結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	後継者が後を継ぐ	0	0%
2	農地を貸付たり、委託をする	6	38%
3	農地を売る	1	6%
4	転用や、売却をして農外の利用をする	0	0%
5	荒らしてしまう	7	44%
6	わからない	1	6%
7	その他	1	6%
	計	16	100%

(3) 現在の生活に関して

問10 普段利用している交通手段

「自家用車を運転」という回答が過半数を占めるという結果となった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	自家用車を運転	13	65%
2	自転車	1	5%
3	バス	3	15%
4	電車	0	0%
5	家族や知人の車	1	5%
6	その他	2	10%
7	不明	0	0%
	計	20	100%

問11 中町集落で困っていること（複数回答あり）

「特になし」と答えた方が多い反面、多方面で不便さを感じているようだった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
-----	------	----	--------

1	交通の便	3	13%
2	買い物	4	17%
3	働く場所	1	4%
4	娯楽施設	1	4%
5	教育環境	1	4%
6	医療施設	3	13%
7	その他	5	21%
8	特になし	4	17%
9	不明	2	8%
	計	24	100%

問12 中町集落の暮らしでの良いところ（複数回答あり）

「人の良さ」という回答が過半数を占めるという結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	自然・景観	2	10%
2	食べ物がおいしい	1	5%
3	人の良さ	11	52%
4	その他	6	29%
5	不明	1	5%
	計	21	100%

(4) 今後の集落での生活に関すること

問13 今後もこの集落に住み続けたいか

「今後も住み続けたい」という回答が70%と最多という結果になった。一方で、「他にいいところがあれば出たい」理由としては、「生活が不便」や、「生活が窮屈」等が挙げられた。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	今後も住み続けたい	14	70%
2	他に良いところがあれば出たい	1	5%
3	他出した後継者の家に移りたい	1	5%
4	わからない	2	10%
5	その他	2	10%
	計	20	100%

問 1 4 他地域から新しく住民が入ることについてどう思うか（複数回答あり）

良いことだと感じている人が多くいる一方で、集落の生活が壊れないか不安に感じているという意見も若干挙がった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	良いことだと思う・うれしい	13	57%
2	不安を感じる	5	22%
3	わからない	0	0%
4	その他	5	22%
	計	23	100%

(5) 集落の活性化について

問15 中町集落が抱えている問題について（複数回答あり）

「少子高齢化」という回答が最多の 35%という結果になった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
1	後継者不足・人手不足	2	9%
2	少子高齢化	8	35%
3	獣害対策	2	9%
4	雇用	1	4%
5	その他	6	26%
6	特になし	3	13%
7	わからない	1	4%
	計	23	100%

問16 今後集落で取り組むべきこととは

「人手不足の改善」「過疎化・高齢化対策」「ボランティアを呼ぶ」という回答がそれぞれ 10%と並ぶ結果となった。

No.	カテゴリ	件数	(全体) %
	人手不足の改善	2	10%
	過疎化・高齢化対策	2	10%
	ボランティアを呼ぶ	2	10%
	大学生を通じた活動	1	5%
	雇用対策	1	5%
	その他	4	20%
	わからない	8	40%
	計	20	100%

(全体%)

(6) その他の意見

聞き取り調査において自由に意見を言って頂いたところ、政策に関する意見や、学生に対する意見などが多数見受けられた。この貴重な意見を次年度の活動に活かしていきたいと思う。

○大学生の活動への期待・要望

- ・「1回の活動だけではなく、懲りずにどんどんきてほしい。」
- ・「これからも活動を継続して行ってほしい。」
- ・「この調査が何をもって実行されているのかがわからないため教えてほしい。」
- ・「外からの目で良いところやお宝を探し出してほしい。」
- ・「色々な視点で調査してもらいたい。」

○集落に対する意見

- ・「料理教室を開いて、家ごとにうま味が違うこづゆの作り方を教えるのはどうか。」
- ・「助け合いが根付いている理由は、やらなければいけない義務だと思っている。」
- ・「みんなで集会所に集まって何かをすることが少ないためやりたい。」

○政策に対する意見

- ・「一人暮らしの高齢者が多いため、デイサービスをもっと充実させてほしい。」
- ・「何か仕事先があればもっと楽しく生活ができると思う。」
- ・「どんどん人が減っていているため対策をしてほしい。」

第3節 住民聞き取り調査のまとめと考察

聞き取り調査に参加して頂いた方のほとんど高齢者の方だったため、人手不足による将来への不安を持っている方が多いようだった。また、中町集落では働く場所が少ないためほとんどの方が農業を主な職業としている方が多いイメージだったが、農業を職業として生計を立てている方は思っていたよりも少なく、余暇の楽しみで作っている方が多いのは意外だった。

家族構成から考察してみると、「一人暮らし」「夫婦のみ」と回答した方が全体の8割を超えており、若い世代はほとんど他出している状況であった。また集落の方も今後、集落が消滅してしまうのではないかと不安に感じている人が多く見受けられた。人手不足を解決していくことは最優先事項だと感じた。そのために移住者を増やしていくことが重要となるが、住民の方の中には移住者が増えることによって環境が悪い意味で変わってしまうのではないかと不安に感じている人も多く見受けられた。住民の不安を取り除くような仕組みを考えていくことが重要な課題の一つだと思われる。

(文責 釘丸昌美)

第4章 西会津町奥川中町地区の住民意識

－聞き取り調査結果から－

第一節 農業経営

1. はじめに

私たちは9月9～12日の4日間にかけて、西会津町奥川地区中町集落19件を対象に聞き取り調査を行った。以下はその際に伺った農業経営の状況についてまとめたものである。

2. 現在の経営耕地等

以下の図表1-2-1に示したように、水田は11件が所有、普通畑は10件所有していることがわかった。また、水田、普通畑などを所有していないお宅も、5件あった。水田と普通畑の面積を比較すると、水田の方が面積は広く、米を農業の軸にしている家庭が多いことが分かった。

図表 1-2-1 経営耕地の所有件数と面積

	耕地所有件数	平均面積	最大面積	※最小面積
水田	11/19件	52.8a	190a	7a
普通畑	10/19件	12.2a	37a	1a
耕作放棄地 (田)	12/19件	41.0a	100a	7a
耕作放棄地 (畑)	4/19件	17.5a	30a	1a

※0aは含めない

3. 山林の所有状況

山林を所有していると回答したお宅は 5 件あった。しかし、森林を保有しているか否かはわかっているものの、所有面積等が分からないお宅が多かった。

木は主に杉・松・雑木であり、面積が分かっている 5 件のお宅における森林の合計所有面積は、31.5ha であった。

枝打ち・間伐等の管理はどのお宅でも行われていなかった。

4. 生產品目

図表 1-4-1 は聞き取り調査によって把握できた、奥川地区中町集落で栽培されている農作物の種類をまとめたものである。品種まで聞き取りできなかったものの「米・野菜を作っている」といった回答もあり、この図表に記されている以外にも多くの野菜が栽培されていると考えられる。春夏秋冬で様々な農作物を栽培しており、基本的に 1 年間を通して農作業に従事している家庭が多いことが分かった。また、中町集落では米・野菜の他に繁殖牛を育てている方もいた。

作られた米は JA に卸し、野菜は自宅で消費している家庭が多かった。特産品であるミネラル野菜をつくっている家庭は直売所等で販売していることが分かった。また竹酢米という減農薬米を作っている方は、ネット通販を利用し個人の顧客に向けても販売していた。

図表 1-4-1 中町集落で作られている農作物

コシヒカリ (竹酢米)	ナス
ヒトメボレ	キュウリ
コガネモチ	ネギ
ダイズ	レタス
ハクサイ	ブロッコリー
ダイコン	セロリ
カリフラワー	トウガラシ
キャベツ	

今回の聞き取り調査の中で、「友人と良いものづくりの競争している」、「少量多品種の野菜づくりをしている」という 70~80 代女性の声が多く見られ、ご高齢ながらも畑に足を運び元気に野菜作りを楽しんでいる事が分かった。

5. 農作業機械・農業用施設

調査対象のお宅のうち、14件で農作業機械を所有していた。機械別の所有件数は、右図表1-5-1の通りである。農作業機械の馬力は様々で、農業経営における規模の広がり確認できた。今後の機械の更新については、大半が「更新しない」という意見であった。その理由として、「コストがかかるため、直しながら使えば長持ちする」との回答が多く見受けられた。一方で「更新する」という回答が多かったのは、畑を中心に作っており耕うん機を所有しているお宅であった。機械を共同で使用している世帯はなかったが、今後視野に入れていきたいとの意見があった。また夫の農業引退を理由にすでに農作業機械を手放したお宅も2件ほどあった。

図表 1-5-1 農業機械の所有件数

農業機械の種類	所有件数
耕うん機	13
田植機	6
コンバイン	6
乾燥機	3
トラクター	3
バインダー	1
ハウス	1

6. 遊休農地(耕作放棄地)がある場合の理由について

遊休農地についての質問を実施したところ、農地を所有している16件のうち12件のお宅から遊休農地があるとの回答があった。地目としては、水田が12件、畑が4件という回答だった。合計で田492a・畑70a、計562aの遊休農地を確認した。

聞き取り調査において、遊休農地となった理由として挙げられたのは以下の通りである。

- ・ 自給分は足りており、作る必要がない
- ・ 1人では手が回らない、体力の限界
- ・ 水路が損壊、水の便が悪い
- ・ 荒れてしまっていて、作物を作っても雑草に負けてしまう
- ・ 遠くて通うのが大変、不便な場所にある
- ・ 自身が病気で農業ができない
- ・ 水田が小さく、農作業機械が入らない
- ・ 獣害の被害が大きいため

面積で考えても耕作放棄地は、経営耕地にも迫る勢いで増えており、深刻な

問題となっている。

7. 農業経営の雇用労働力の有無と状況

農作業に従事している14件のお宅の中で人を雇って農作業を行っているお宅はなかった。しかし、これまでの歴史の中で、小作人に畑を作らせていた時代もあるとお話を伺うことができた。現状では、耕作地縮小の中で人を雇う予定はないという回答が多く見られた。

1-8. 借入・貸付地について

今回聞き取り調査を実施した19件の中で農地の貸付のみを行っているお宅は5件であり、農地の借入のみをしているお宅は4件であった。また、貸付・借入のどちらもしているお宅は2件あった。

農地の貸し付けをするようになった理由は「条件がよくまとまっていて借り手が見つかりやすかった」、「依頼されて」、「周りに相手方の田があった」等があり、借り入れの経緯としては「自分から頼んで貸してもらった」、「相手方の高齢化のため頼まれて」等が挙げられた。

また借入・貸付の相手は、集落内の人が多く、これに次いで奥川地区の人が多く見られた。そのほかにも親戚に貸付を行っているお宅もあった。10a当たりの地代としては、貸付・借入併せて回答が寄せられた5件のうち3件が10aあたり1俵であった。

今後の見通しとしては、継続して貸付・借入を行っていきたいという声が多かった。一方で、「貸している人が高齢化し、小作料も年々下がっている」と言った回答もあり、借り手の高齢化も顕在化していることが分かった。

1-9. 農業観について

「農業に従事している方がどのような気持ちで農業に励んでいるか」についての回答は以下の通りである。

- ・規模は現在のままで、個人販売を100%にしたい。
- ・こだわりをもった作り方に生きがいをもっている。絶対の自信をもっている
- ・畑にいる人に会えるのが良い

- ・作物の成長を見るのが楽しい
- ・農業は自由に出来るから良い
- ・良い価格で育てた物が売れると嬉しい
- ・代々作ってきたから
- ・利益にはならない

このように、多くの方が生計を立てる為・農地を荒らさないようにする為だけでなく、農業にやりがいを持ち楽しみながら取り組んでいることが分かった。

1-10. 今後の世代交代・農地継承について

聞き取り調査では今後の農地継承について「土地を貸したい人・貸してくれる人はいるが借りる人がいない」という問題を心配している方も多くいた。

貸し付けると回答した方からも、「借り手がいなければ荒らしておく」という意見があった。

(文責 国分麻里奈)

第2節 集落の役割と課題について

1. 共同作業について

奥川中町集落では、堰上げ、草刈り、雪囲いの設置などの共同作業が行われており、それらは集落の維持に重要な役割を果たしている。聞き取り調査によって、「地区の共同作業への参加の頻度・理由」について尋ねると、19件のうち13件は、参加頻度などは異なるが、「参加している」という回答だった。参加理由としては、「義務感から」、「土地を持っているからにはやらなければならない」などが挙げられた。一方で「参加していない」という回答は3件あり、「以前は参加していたが、体が動かなくなった」、「歳をとってできなくなった」などの理由からで、不参加の場合は半日2500円を支払っている。また、自分は参加できないが、息子や他部落の知り合いに頼んでいるといった回答は3件あった。

参加している人の中では、「人が少ないため負担が大きい」といった意見が2件あった。作業に「負担を感じていない」といった人も過疎化や高齢化を不安視している意見が多かった。

また、外から来た若者が共同作業に参加することに対しては、「ボランティアで若い人が来てくれると、助かるし元気が出る」、「新しい発見があり、来てもらえるならもっと来てほしい」、「素人でも助かる」といった意見が多かった。一方で、「悪くは思わないが、慣れていない住民にとっては知らない人がたくさん来たら驚くのではないか」、「多すぎると不安もある」といった、外から若者が多く来ることに対する不安の声もあった。

2. 中山間地域等直接支払制度について

中山間地域等直接支払制度とは、「農業生産条件の不利な中山間地域等において、集落等を単位に、農用地を維持・管理していくための取決め（協定）を締結し、それにしたがって農業生産活動等を行う場合に、面積に応じて一定額を交付する仕組み」⁶である。

聞き取り調査により、「中山間直接支払制度に対する評価、お金の使い方や集

⁶ 農林水産省 web サイトより

http://www.maff.go.jp/j/nousin/tyusan/siharai_seido/pdf/h30_panf.pdf

落への要望など」について伺った。「微々たる額だが続けて欲しい」、「部落にお金がおりにくるので良いと思う」、「このおかげで人足が継続できていると思う」といった制度に対して好意的な意見が3件見られた。一方で「1、2期は用途が決められていなかったが、最近は縛りがある。5期目をどうするか」、「お金が出ても大変である」、「継続は危うい。協定で耕作放棄地にできないが、労働力不足で管理が大変」といった懸念の声も見られた。しかし「よくわからない」といった回答が7件と最も多く、この制度があまり認知されていないように感じた。

3. 他出世帯の農地・空き家・墓について

「他出世帯の農地・空き家・墓の管理はどのように行っているか、問題は起きているか」と伺った。

農地については「管理していない」という回答が見られた。「家によそ者を入れたくないという感覚が強い。登記の問題も大きい」という意見があり、他出世帯の農地を管理するのは難しいことであるとわかった。しかし「耕作放棄地にイノシシが寝ていたりする」、「防災のために管理はすべき。新田は条件が悪く、9割が荒れている」という声も見られ、獣害の温床となってしまうなどの危険性があり、耕作放棄地の管理は大きな問題であると感じた。

空き家については、全体的に「管理していない」という回答が多かった。一方で「隣の空き家の畑を借りて面倒を見ている」、「隣の家には猫がいたが、猫を置いて空き家になったため、面倒を見た」といった回答や、「親類が管理している」という回答も見られた。問題としては、「空き家にハクビシンが住んでいる」、「動物の住処になっている」、「周りに空き家が多い。放置すると景観が悪い。獣害(サル・イノシシ)なども」といったものがあげられ、放置された空き家は、集落の安全性や外観に影響を及ぼしている。そのような空き家に対して、「空き家バンクに登録するよう呼びかけている」といった管理を促す意見もあった。また、「他の地域から来た人を空き家に入れたほうが良いと思うが、小さい集落はよそ者を排除しがち」という不安の声も見られた。

墓については「管理は家々で行っている」という回答が6件あり、個人管理という意識が強いように感じた。「家の近くにお墓があり、盆・正月に行く」、「時々帰ってきて墓参りや庭掃除をしている人もいる」といった意見も見られた。また、親戚や知人が管理してくれるという意見もあった。問題としては、「墓周りの大きい木が枯れかかっている、倒れそうで心配」、「サルがお供え物を荒らして大変」といった声があった。

4. 中町集落の課題について

中町集落の課題や今後取り組むべきことについて伺ったところ、「過疎化や高齢化」、「獣害対策」、「除雪」、「雇用」などに関する意見が得られた。

「過疎化、高齢化」については、「若い人がいない、子どもがいて欲しい」、「集落で過疎化に対する活動をしてほしい」、「人が少なくなっていて数年後何軒残るのか。存続はできるのか」、「高齢化によって部落の安全性が低下している」といった意見が挙げられた。

「獣害対策」については、「電柵には取り組んでいるが被害は出る」という意見があった。獣害対策の専門員の方がおり、住民の方向けに講習会を開くなどして、住民主体で対策に取り組めるよう活動なさっているようだ。

「除雪」については、「雪崩の処理などは力仕事で男手が欲しい」という意見が見られた。また、他村の知人にお金を払って雪かきをしてもらっている人もおり、高齢な方が多い中での除雪はかなり大変な作業であると感じた。

「雇用」については、「仕事がないから子供が戻ってこない。若い人の雇用が必要」、「職がないためか、80代、90代が多い」との意見が挙げられた。

その他にはこのような意見が挙げられた。

- ・「取り組むことは現状維持で精いっぱい」
- ・「部落の人との交流が課題」
- ・「隣近所の付き合い。来てくれる人を受け入れる、イベントを通して楽しくなってもらいたい」
- ・「病気が心配、健康状態を見る活動はないが、お茶のみで互いの様子を見るようにしている」

(文責 伊藤千尋)

第3節 日常生活全般について

1. 日頃の交通手段について

調査の結果、日常生活の移動手段は「自家用車」という方が多く13名、「その他」が6名であった。

「その他」の回答としては、「知り合いや家族に頼んで乗せてもらう」、「定時定路線バスやデマンドバスの利用」、「病院の送迎」などが挙げられた。自家用車を所有していない人の主な足としてデマンドバスなどの町民バスが活躍していることが分かった。

2. 集落の生活で困っていることについて

集落の生活において困っていることを伺うと、「雪かきや草刈」、「重いものを持つのが大変」、「交通の便が悪いので買い物をするのが大変」、「お店が少ない」、「病院が遠い」、「働く場所が欲しい」、「歯医者や映画館などの娯楽、ドラッグストアなどが欲しい」、「保育所などが無いし新しい人も来ないため子供達の声が聞こえない」などが挙げられた。奥川は豪雪地帯のため、冬になると雪かきが大変だという意見が多かった。一方で、「慣れれば問題ないので諦めている」といった意見もあった。

3. 集落での暮らしの良いところについて

集落での暮らしの良いところを伺うと、「自然がのどかで水がおいしい」、「ほとんどが顔見知りで仲が良い」、「困った時に助けてくれる優しい人ばかり」、「畑が交流の場になっている」、「週に一回移動販売が来てくれる」という意見が挙げられた。特に、集落の人々との繋がりや強さを良いところとする意見が多かった。

4. 地区の行事やお祭りについて

町内運動会や奥川地区敬老会、盆踊り、七観音ウォーク、奥川マラソン、そば祭りなどが挙げられた。「お祭りや行事で人と接するのが喜び」という声がある一方で、「仕事のためほとんど参加しておらず何の行事があるのか分からない」、「子供は参加しているが自分は参加していない」、「昔は運営に携わっていたが今は引退したので行事のことについてほとんど分からない」といった声もあった。

5. 屋号について

屋号とは、名字の代わりに用いる、その家の呼び名、家の通称のことである。昔に酒を造っていたので「さかや」、バスの車庫だったところの近くに先祖が住んでいたことから「車庫」など、様々なものがあった。

6. 我が家や地域のお宝について

焼きばんこや、いろり、わら細工、蔵にある古い多くの資料など多くのお宝が挙げられた。また、虫よけのために虫をかごに集めて、学校に行って「よろずの虫を送るとや」といって太鼓を3回たたくという「虫おくり」という行事も挙げられた。



(矢部哲夫さんのお宅で見せていただいた貴重なお宝)

7. 今後の定住意向について

今後の定住意向を伺うと、15名がこの土地に「住み続けたい」と答えた。「分からない」という方の意見は、「他出した後継者の家に移る」、「他に良いところがあれば出たい」というものだった。ほとんどの人が「住み続けたい」と答えたが、その中にも「他に住む場所がないため住み続けるしかない」といった意見も少数ながらあった。

8. Iターン、移住者について

Iターン、移住者についてどう思うか伺ったところ、大半の人が「来てほしい」という意見だった。「人との交流は好きなので不安はない」、「隣に知らない人が来ても抵抗はない」、「大歓迎する。来る人拒まずなので、来てくれたら色々とお話をして交流を深めていきたい」といった前向きな意見がある一方で、「いきなり来るよりもどんな人か分かってから来てほしい」、「今までの生活とのギャップを埋められるか、馴染めるか積極的に行事に参加してくれるかが不安」、「知らない人が来るのは不安だらけでもある。ちゃんと交流できるのか」、「住むとなると昔からの閉鎖的な感じだよそ者扱いを感じてしまうのではないかなどといった不安も多く挙げられた。「新しい人が来ても積極的に関わりたいとは思わない」といった意見もみられた。

9. 地区内の空き家の利活用について

住民の方々が空き家の利活用についてどう考えているのか伺うと、「空き家を利用するのは良いことなので是非活用してほしい」という意見がほとんどであった。具体的な内容としては、「若い人が住んでほしい」、「リフォームして学生や人足の拠点とすればいいと思う」、「高齢者が使える施設にしてほしい」などである。一方で「空き家はそっとしておいてほしいという気持ちがある。人に貸すならばトイレやお風呂などをしっかり直してからにすべき」という意見もあった。

空き家の存在自体に「地震などで倒壊するのではないかな」、「今はなっていないが今後ゴミ屋敷になるのではないかな」と不安を抱えている人もおり、「できれば綺麗にして活用してほしいけれどお金がかかる」といった金銭的に難しいのではないかと不安視する意見もあった。

また元々空き家であったところに現在住んでいる方のお話では、「空き家に住むことへの抵抗は無かったが、ネズミが出たり家に隙間や痛みがあったりする。ネズミの追い払い対策などが必要」という意見が挙げられた。

(文責: 菱事奈央)

第4節 まとめ・考察

この第4節では、前述の第1節から第3節それぞれについてまとめ・考察を行う。

1. 第1節について

農業の現状について調べたが、耕作地の面積から、中町集落では農業で生計を立てている方は少なく、家計の足しにしている、趣味として野菜を育てている、自分の家で食べる分を育てているお宅が多いことが分かった。

農業をしているお宅全14件のうち、農業をしている女性は8名おり、うち6名が80代の女性であった。また最年長の女性は85歳で、現役で畑仕事をしていて、中町集落における女性たちの元気さをデータからも伺うことができた。また農業観に関する聞き取りからは、畑が地域コミュニケーションをつなぐ役割を果たしていること、一人ひとり作物にこだわりを持って作られていることが分かった。

一方で、耕作放棄地は聞き取り調査結果を集計すると約562aあることが分かった。住民の方の回答から、農業の引退に伴い今後も耕作放棄地が増えていくことが予想される。一度荒らしてしまった農地を元に戻すのは相当の手間とコストが必要となるため、できるだけ早く行動に移さなければならない課題であると考えられる。

2. 第2節について

第2節では、集落の現状と課題についての調査結果をまとめた。共同作業については多くの方が積極的に参加されているのが印象的だった。しかし、高齢な方にとっては大変な作業であるため、若者が共同作業に参加することの必要性が感じられた。しかし、外部から若者が参加する場合には、地域の方々を驚かせてしまわないよう、人数や地域の方々との関わり方に配慮しなければならないと感じた。また、放置された農地や空き家、墓に関しては獣害の対象になるなどの問題が多く発生しており、改善するための取り組みが必要であると感じた。集落の維持、活性化のために、若者の定住、移住者を増やす方法を考えていかなければならないと思った。

2. 第3節について

第3節では、地域での日常生活についてのことや、移住者や空き家の利活用についての調査結果をまとめた。あまりお店や施設がない中で、多くの人々が助け合って生活していて、家族以外の人々のつながりも深い地域であると感じた。ま

た、奥川ののどかな自然や昔ながらの行事などを大切に思っていることが分かった。空き家の利活用は多くの人々が望んでいるが時間と手間と費用がかかることが課題なので、そこをどのように乗り越えて地域活性化に貢献できるような取り組みをしていくか考える必要がある。

第5章 まとめと考察

第1節 全体を通じて

私たちは、西会津町奥川地区・中町集落でフィールドワークを行い、地域の行事に参加するとともに住民への聞き取り調査を実施した。それを通じて、集落の人手不足や空き家などの地域の弱みがある一方で、中町集落にしかない今後守り続けていきたいお宝や魅力などの地域の強みを知ることが出来た。

今、過疎・中山間地域の活性化に対する取り組みは全国で行われているものの、少子高齢化や農業の後継者問題なども加わり地方の衰退はこれからさらに悪化することが予想されている。国や自治体などの様々な取り組みも実際にそこに住んでいる人にとっては、効果が感じられないことが多いのも現実である。私たちは、実際に住民の方々に詳しくお話を聞き、地域の方の本音を聞くことができた。また、よそ者の視点でその地域を見ることで、住民の方が当たり前すぎて感じない魅力を見つけ、地域のお宝や魅力を再発見することができた。本章では、この調査で得たことをまとめることで、私たち学生目線から考える中町集落の活性化の方向性について提示したいと思う。

これまでのフィールドワークや聞き取り調査の結果をもとに、学生から見た中町集落での課題、気づきをまとめる。はじめに日常生活についてである。中町集落では農業に従事している世帯が多く、フィールドワークをした中でも元気に農作業をしている住民の方々がたくさん見受けられた。聞き取り調査からも、「趣味として野菜を育てている」、「畑にいる人に会えるのがうれしい」ということが挙げられており、農業にやりがいをもって従事していることを知ることが出来た。その中でも、集落の「ばあちゃん」たちがみんなでお互いに高めあいながら農業をやり、こだわりの野菜を作っているのが印象的だった。ここから、元気な「ばあちゃん」たちを中町集落のお宝として挙げ、「ばあちゃん」たちの活動を集落の活性化につなげていけるのではないかと考える。

また、昔から集落内で、その家の特徴をもとにつけられる屋号をお互いに呼び合っていることが分かった。屋号について聞いた際には、昔酒を造っていたので「さかや」などさまざまな屋号が挙げられた。この屋号を呼び合うという習慣は住民の方々にとっては当たり前かもしれないが、私たち学生の目には新鮮にうつったことから、中町集落の魅力の一つとして取り上げ、活用できないかと考え

る。

次は、集落の共同作業、人足についてである。私たちは、実際に集落の人足に参加し、住民の多くの人々が積極的に参加している一方で、高齢のため参加が難しい場合や体力的にも辛い作業が多いことから、若者などの人手が必要であることを感じた。聞き取り調査では、外から来た若者が人足に参加することに対して、「知らない人がたくさん来たら驚く」などといった不安の声があったが、「助かるし元気が出る」、「新しい発見がある」といったよそ者を好意的に見ている方々がほとんどであった。人足という集落の共同作業は住民の方々には当たり前で必要不可欠であるが、私たちよそ者にとっては田舎の暮らしを体験出来て、その地域の人と交流できる良い機会ではないかと感じた。そこで、私たちは人足を通じて、これを1つのツアーとして活かせるのではないかと考える。モデルコースの一例については第2節で取り上げる。人足を活用して集落に人手を集めるきっかけとなるには、集落の人足に参加する人を募集することはもちろんのこと、よそ者が来ることが負担にならないように集落の方々とよそもの関係を深める取り組みをしていくことが必要だと思う。

最後に、空き家についてである。中町集落には空き家が多くみられるが、聞き取り調査からは、管理できていない空き家について、「動物の住処になっている」、「景観が悪い」などの声があがっている。その状態を改善するために空き家の利活用をすることに対しては、「ぜひ活用してほしい」という意見が多く、その活用の主体として若者の力に期待しているという意見もあった。その中で、「人に貸すならばしっかり直さなければならない」などといった助言もいただいた。

このことから、しっかり利活用のビジョンを立て、学生と中町集落のみなさんと一緒にできる空き家の利活用の方法を模索していきたい。

以上のことを踏まえて、次の第2節では今後の中町集落の活性化を探っていく。

第2節 活性化の方向性について

ここでは第1節で述べた中町集落の課題や気づきを踏まえて、日常生活、人足、空き家の3つの視点から、集落活性化のための具体的な提案を提示していきたい。

とくにここでは、現地の方と集落を訪れる人々との出会いの機会を作ること
に重点を置いて述べていきたい。

《一日孫体験》

現地の方と親しくなるための取り組みとして、一日孫体験を提案したい。

これは、学生が集会所または家にお邪魔し、農作業を手伝ったり、掃除を手伝ったりする。手伝う内容はその人ごとに変えることができ、いろんなことを手伝いながら親睦を深めるのが目的である。そしてこの体験は、現地の方との距離を近づけることができるだけでなく、より多くの方と関わる機会を
図ることもできる。

学生の活動の特性として、毎年参加するメンバーの入れ替わりがあることは避けることができない。参加する学生と現地の方のつながりを深くするためにも、この活動は効果的である
と考える。

また、この体験をしながら、奥川でのこれまでの暮らしを聞き書きし、記録に残すことで今後の中町集落のコミュニティ史として残す活動につなげていきたい。活動を通し、親睦を深めることで、より多くの話をし、その中で今回の聞き取り調査のように、もしくは、普通に世間話をするように聞き書きを行い、集落の記録として残していけるとよいと考える。

《屋号マップの作成》

一軒一軒の呼び名である屋号を活かすために、集落の屋号を集めた屋号マップを作
ることを提案したい。

ここでは、先行事例として、新潟県長岡市川口町木沢集落の「KIZAWART」という取り組みの中の「屋号看板プロジェクト」⁷を紹介する。内容は、集落の各家で屋号を看板にして玄関に飾るとい
うものである。また、この集落では散策

⁷ 新潟県長岡市川口地区木沢集落HP「ようこそ木沢へ！」 echigo-kizawa.com

コースがマップとして作られており、その中で屋号看板が紹介され、ただ飾られるだけでなく、集落を訪れる人の目を楽しませるスポットの一つにもなっている。



【屋号看板の写真】

実際に、中町集落の岩橋義平さんのお宅でも屋号看板が飾られている。岩橋さんは新潟での事例についての見聞があり、すでに屋号を自らの運営している民宿兼住居に掛けておられる。

ここから、私たちは新潟での先行事例や岩橋さんの行っている事例を踏まえて、屋号マップを作ることを提案する。屋号マップとは、中町集落の住民に関する屋号を各家々にまとめ、それをマップ化したものである。この時、そのマップには屋号だけでなく、人財マップとしての活用もしていきたいと考えている。それにより、集落にどのような名人がいるのか、家の屋号や歴史など、中町集落にしかない魅力を再発見し、それを発信できるようなツールになると思う。

このマップが完成すれば、それを、先述した農業体験と関連させて、一種の「中町集落体験ツアー」のような活動まで発展させていけるのではないだろうか。この他にも屋号マップを活用する方法を考え、集落の活動に合った活用をしていきたいと思う。屋号という地域の日常生活の一部を切り取り、地域の魅力として発信するのは一つの試みとして検討してみるべきだと考えている。

《人足体験ツアー》

ここでは、人足の人手不足の問題について考えるとともに、観光と結びつけることで、課題解決していく方向性について検討する。

聞き取り調査においてわかるように、集落の高齢化につれて、作業の困難化が起きている。その解決のために、「外から人に来てもらう」ということがあげられる。実際に私たち福大生が人足に参加したことで、「作業が捗った」などという感想をいただくことができた。

そこで、福大生の経験を生かして、人足ボランティアを募集することを提案し

たい。冬の時期に除雪ボランティアが来ているということを聞いたため、それを人足でも活用することができるのではないだろうか。

募集する方法は、Facebook を利用することでより多くの人に伝えることができると思う。また、西会津に移住・定住した「佐々木さん夫婦」や「芸術村の矢部さん」にもご協力をいただきシェアしていただくことで、より拡散することができると思う。この方々は日ごろから常に情報を発信しており、協力・連携を図ることは大切であろう。

ただし、人足は朝早くからの作業が主なものであり、ボランティアの方、つまり、外から来た方は前泊が必須である。そこで、ただ前泊するのではなく、観光も一緒にしてもらおう、ということをご提案したい。

だが、初めて、またはまだ西会津、奥川地区に慣れていない人にとって、「どこをどう見たらいいのかわからない」のが本音であろう。そこで、観光ツアーの目安となるスケジュールのモデルを最初から提示しておくのはどうであろう（表1）。それならば、自分の時間の流れを想像しやすく、参加してみようかな、行ってみようかな、という気持ちにさせることができるのではないだろうか。

表1 モデルコース

1日目	2日目
お昼ごろ到着	7時～ 人足
13時～ 農業体験・自然体験 もとじい散歩や純ちゃん散歩	12時～ 懇親会 15時～ ロータスインにて入浴 16時30分～ 帰路
16時～ 民泊でご飯・お風呂・就寝	

ここでのモデルコースは、自然体験・農業体験を中心に組み立てたが、七観音ウォーク内のどれかを周るのでもよいし、他の集落を周る奥川一周旅行でもよい。または、前述した屋号マップに即したツアーやばあちゃんの畑体験ツアーでもよい。

ここで大切なのは、西会津に来ていただいた方を一人にするのではなく、そこに、現地の人、現地を知る人が参加し、案内しながら過ごすということである。自分たち福大生が西会津に来るときには必ず小林さんや義平さんなど、現地を知る人がそばにいてくれ、暇だと思いう時間がなかった。他の観光客にとっても、

何しようとしたら悩むよりは提案されていることがうれしいこともある。また、ただ回るよりも説明してくれる人がいるだけで、その時間は有意義なものとなり、記憶にも残りやすいと考える。また、より人と接する時間が長いことで、現地の人とのつながりも強くなり、また来たいと思えるきっかけになると考える。

さらに、観光客とより多くの現地の方が触れ合うためには、懇親会が重要である。今人足後の慰労会は、人足に参加した人のみが参加するような流れとなっているが、そこを変えて、人足に参加できなかった住民の方にも積極的に参加してもらうようにするのはどうだろうか。

そこで、福大生ができることは、観光客と現地の人とのつながりを作る協力であると考えられる。福大生が現地の方とのつなぎ役となれば、人足や懇親会に参加する際、現地の方の緊張をといたり、話のきっかけを作ったりすることができるのではないだろうか。

《学生による情報の発信》

現在、奥川地区では、義平さんが Facebook を活用して、情報を発信している。情報の拡散方法については前述した通りだ。しかし、発信だけではなく、どんな内容の情報が欲しいのかという意見を現地から出してもらえたため、ここでは、発信する情報の内容について考えたい。特に、人足のボランティアを募集することについて考えたい。

「堰上げの人足、草刈りの人足とだけ聞くと大変そうというイメージを持たれる」という意見が学生の中から出た。確かに肉体労働であり、大変である。しかし、人足の道中、山菜やキノコ採り、花の説明など、普段山の中に入らない私たちのために、多くのことを説明しながら作業をしてくださり、慰労会でとりたてを食べたり、お土産として持たしてくれたり、最終的には楽しいという印象を持つことができた。このように、ただ、地区の共同作業の大変さを説明するのではなく、楽しみ、達成感ということを前面にアピールすることが大切だと考える。そのためには、これまで来ていただいた方の感想等をもっと積極的に紹介してもよいのではないかと。例えば、感想をまとめたものを学生が作成し、今ある情報発信に付け加えていただいで発信することもできるだろう。

《人足ボランティアの拠点づくり》

空き家を改築し、人足を手伝いに来てくれた人たちのための拠点をすることを

提案する。2018（平成30）年7月1日に開催された学生と住民の方の交流会で、「これからの奥川を活性化させていくためにはどうするか」を話し合った際に、「空き家をリフォームして、西会津に来たボランティアの方々の拠点にしたい」という意見が出され、採用された。今年の秋から、空き家のリフォームプロジェクトは、行政の支援のもと実行に移され、中町集落の空き家をお借りし、奥川に人足の手伝いをしに来た人などの拠点にすることを目的に現在、活動を進めている。



【学生が参加した空き家掃除の様子】

《空き家の外観をきれいに》

空き家の利活用には、コストの問題やそれに見合うような使用目的が必要になり、すべての空き家を改善することは難しい。そこで、問題解決の一つの手段として空き家の景観を保つということを目的として、空き家の外観をきれいにする活動を行いたいと思う。

空き家があることによる獣害や衛生上の問題は、ここ最近では福島のみならず全国的にも深刻化している。また、空き家が目立つ地区は、景観や人々の活気の少なさを顕著に表しかねない。よって、大幅なコストをかけずに空き家を維持し、少しでも長くきれいな状態で置くことを、現実的な解決策として考える必要があるのではないだろうか。人足など地域の共同作業のように協力して、月に何回か外の草むしりや中の掃除をする活動をするだけでも空き家の外観は維持されるだろう。そのためには、住民の方々にも協力をお願いし、住民の方々と大学生の力を合わせて活動を進めていきたい。

また、先述した屋号看板で景観を良くするという事例のように、芸術分野の取

り組みも一つの景観維持につながるのではないだろうかと考えている。しかし、この活動は学生の知識だけでは難しいので、芸術面からの空き家の景観維持には、西会津町にある芸術村の方々のアドバイスをいただければと考えている。

第3節 おわりに

今回の調査を通し、ほんの一部に過ぎないかもしれないが、中町集落の課題や再発見した地域の魅力を知ることができた。住民の方々は快く協力していただき、集落への不安などのマイナス面を口にするのではなく、集落の魅力などのプラス面を多く出してくださるなど、とても前向きな考えを持った方々が多いことが印象的だった。

以上に挙げた提案は、私たちがこの1年間実際に体験してきたことに基づくものなので、地区の人々にとって疑問点があるかもしれない。そこは、ぜひご指導いただき話し合いをしていきたいと考える。そうすることで今後より奥川が活性化される起点になるのではないだろうか。これからも私たち福大生と一緒に奥川の可能性を探ってくださることを心から願っている。

(文責：白井 綾乃 遊佐 善智恵)

第6章 フィールドワークの感想

今年度から西会津町に本格的に調査に入るということで、最初は多くの不安がありました。見ず知らずの大学生が調査に入ることに對して住民の方々に受け入れてもらえないのではないか、調査にうまく協力してもらえないのではないか、とっていました。自分が調査を行うこと自体も初めてで、うまく調査できないのではないか、何か迷惑をおかけしてしまうのではないか、とっていました。しかしこちら側の不安など吹き飛ばすほど住民の方々には調査に協力していただきました。こちらが分からないことは丁寧に教えていただき、調査にも積極的に参加していただき、とてもスムーズに調査を行なえたなと感じています。

調査を行ってみて感じたことは、住民の方々が中町集落の少子高齢化問題や空き家問題に対してとても関心があり、どうにかしたい、集落を盛り上げたいという気持ちを持っているということでした。しかし、どうにかしたいが人手が足りない、若い人が少なく活気が足りないと考えている方も多く、そういう問題の解決に、これからも大学生が協力していけたらと思います。

そして私たち大学生の発信力でこの中町集落の魅力を外に発信し、集落の活性化のお手伝いをこれからもしていけたら、と思いました。

板橋実花

今回私は岩崎ゼミの活動の一環として西会津町奥川地区に調査に入らせていただき、西会津での行事への参加や住民の方への聞き取り調査などをさせていただきました。聞き取り調査をすること自体は私たち三年生は初めてのことであったため、不安も多かったのですが、住民の方々が私たちを快く受け入れてくださり、聞き取り調査をスムーズに気持ちよく進めることができました。住民の方々には本当に感謝しています。

今回このような活動をさせていただいて、西会津の方々の温かさや人柄の良さであったり、町の雰囲気を感じることができました。それと同時に集落を存続していくための人手不足や住民の高齢化、空き家が多く存在している問題など、この町がどのような問題を抱えているのかを知ることができました。また、これらの問題は解決するのが困難であるとして現代では多々挙げられますが、この問題の解決に向けた意見などが聞き取り調査で多く挙がったりなど、住民の方々の町の問題解決への前向きな意識を感じ取ることができました。

これからの活動では住民の方々から出た意見などを取り入れながら、私たち

大学生も西会津町の問題解決や活性化に向けての対策を考えていきたいと思っています。今回の調査を通じて西会津町の住民の方々と交流することができたので、これからも西会津町に私たち学生が関わり、少しでも西会津町の力になれば幸いです。

最後になりますが、今回は私たち学生にご協力くださり本当にありがとうございました。

門脇優真

私は、昨年度から西会津奥川地区にゼミ活動で何度かお邪魔させていただき、今年度から本格的に調査に入らせていただきました。最初はゼミのフィールドワーク自体どのような姿勢で臨めばよいか不安なことだらけでした。しかし、奥川地区の住民の皆さん、地域おこし協力隊の方など、多くの人々からいつも優しく、時に厳しく接していただき、充実したゼミ活動をすることができました。この場をお借りして、改めて感謝申し上げます。

聞き取り調査を実施し、私が感じたことは「そこに暮らす人々の率直な気持ちを何よりも大切にしなければならない」ということです。

今回、聞き取り調査を実施させていただいたのは、奥川地区中町集落で、高齢化率は60%を超えています。今、日本では少子高齢化が大きな問題として取り上げられ、地方に行けば行くほど深刻化しています。

私は、調査に入る前、「中町集落に暮らす人はさぞかし不便に暮らしているのだろう」「やりたいことがあっても実現できないのではないか」など中町集落に対してマイナスな思考を持っていました。しかし、それは偏見だとわかりました。中町集落の住民の方が持っていたのは、今の生活への充実感と前向きな考え方でした。家が少ないからこそ、住民同士、横のつながりが強く、調査に参加してくださった皆さんの会話には笑いが絶えず、笑顔が輝いていました。また、集落の現状を他人事にするのではなく、一当事者としての意識が強く、集落に関する不安よりも希望を口にする光景が多く見られました。

今回の調査を通じて、大学でのゼミ活動では得られない、住民の皆さんの生の声をお聞きすることができました。今回の調査に満足することなく、継続的な調査を続け、地域と大学生とのつながりを深めていきたいと考えています。

岩崎教授は日頃から「現地にあるもの（お宝）を探そう」ということをゼミで口にしていきます。中町集落では、地域にある資源を生かし、日々の生活を充実させていくことを当たり前のように実践していました。その果てにある皆さんの笑顔こそが地域に根付く一番のお宝なのかもしれません。

柴田雄登

今年度の活動から本格的な調査を初めて開始したため住民の方々は私達を受け入れてくださるか不安でした。しかし、住民の方々は快く調査に協力して下さい不安はすぐに消えました。改めて協力して下さいった住民の方々には感謝致します。

今年度の調査で見えてきたことは、集落の活性化に積極的な意見を持っていることです。聞き取り調査の中で集落活性化のためにどんな事をすれば良いかの意見をたくさん持っていて今後の活動の提案をして下さったことにとっても驚きました。

また、大学生が集落に入ることについて肯定的に思っている方が多く、期待して頂いているので今後の活動ではこの調査で見えてきた課題や住民の方の提案を取り入れながら活動していきたいと思います。

そして調査以外の活動でも西会津町の方々と交流することができたことをとても嬉しく思います。このような活動に大学生が関わっていくことで西会津町の魅力を外に発信していくことが出来ると思うので、これからも積極的に参加していきたいと思います。

釘丸昌美

西会津町奥川地区では中町集落を中心に多くのフィールドワークを実施させていただき、中町集落の歴史や人々の暮らしなど多くのことを学ばせていただきました。その中で、特に印象に残ったことは人々の温かさです。私は今祖父・祖母とも一緒に暮らしていますが、中町集落の皆さんは私の祖父母と同じように気さくな優しさで接して下さり、実家だけでなく遠くの場所にも家族ができたような感覚でした。

今回中町集落の聞き取り調査では、後継者の他出による人口の減少や遊休農地が増加していく見通しが見受けられました。このような地域の課題の進行を食い止め、改善していく方法をこれからの活動を通し地域の方々と共にこれからも模索していきたいと思います。

聞き取り調査の中では答えにくい質問もいくつかあったとは思いますが、皆さんのご協力のもとこうして一冊の調査報告書を作り上げることができました。ありがとうございました。私は、今回のように1つの集落を分析し、皆さんの回答をまとめ、表にあらわしたり、数値化する活動は私たち大学生だけでなく、集落の方々にも意義のあるものだと思います。この資料から中町集落が抱える問題だけでなく、集落独自のいいところなど、魅力の再発見していく上で役立てていただけたら幸いです。

国分麻里奈

西会津町奥川地区の中町集落を中心に調査を行い、さまざまな地域の活動に参加させていただきました。どの活動でも住民の方々はこころよく受け入れてくださり、また、地域のことをたくさん教えてくださいました。最初は緊張してしまい、不安もありましたが、西会津の自然や、人のあたたかさに触れていくうちに、こちらも元気をいただきながら、さまざまな学びを得ることができたように思います。

今回の聞き取り調査にあたって、住民の方々には、お忙しい中協力していただき、感謝申し上げます。今回の調査では、中町集落の住民の方々の現在の暮らしや、今後の集落に対する思いを知ることができました。また、中町集落では過疎化、高齢化が進んでおり、人足作業での人手不足、空き家や耕作放棄地の増加などの課題も多くあるとわかりました。そのような課題を改善し、地域活性化につながるような解決策を、住民の方々の意見をもとに、大学生としての視点を交えながら考えていきたいと思っております。また、今後も積極的に地域の活動に参加させていただき、より交流を深めていけたらうれしいです。

伊藤千尋

私にとって初めてのフィールドワークが西会津町奥川地区でした。住民の方々との交流や人足など初めてで右も左も分からない私に優しく話しかけてくださったり、作業の仕方を教えてくださいたりして奥川地区の方々はとても暖かいなと感じました。おかげさまで私たちも楽しみながら活動することができました。

また、お忙しい中聞き取り調査にご協力いただき本当にありがとうございました。住民の方々は自分が住んでいる中町集落についてどう思っているのかを知りたかったので、今回の聞き取り調査で住民の方々の思いを聞くことができとても良い体験になりました。少子高齢化が進む中で住民の皆さんも悩み苦労されていましたが、それに負けずにみんなで団結して地域のために頑張る皆さんの姿を見て、私たち大学生も何か力になりたいと強く感じました。この調査で住民の皆さんが考える地区の課題やお宝など様々なことが知れたので、今後は調査結果を生かし地区をさらに発展させていけるように活動を頑張りたいと思います。

菱事奈央

今回の調査の中で、学生が人足など行事への参加や聞き取り調査を行った際に、温かく迎えてくださった地域の方々に感謝しています。行事への参加や聞き取り調査をさせていただいた中で、住民の方々から、地域の良さや歴史をたくさん教えていただきました。例えば、聞き取り調査で地域のお宝を各々持ってきていただいた際に、私たちに丁寧に教えてくださったり、農業では地域の人たちの間で交流を大事にし、楽しみながら作っているとおっしゃっていたりしたことが印象に残っています。これからもこのような奥川地区・中町集落の良さを残していかなければならないと感じました。

しかしその一方で、集落には多くの課題があることが分かりました。それは、集落の維持に不可欠な人足での人手不足や空き家問題などが挙げられます。これらの問題は、全国の少子高齢化に悩む地域に共通しており、それらの地域ではすでにさまざまな課題解決のための活動が行われています。そのような先行事例に習うことは大切なことではありますが、聞き取り調査の際に集落の方々から、人足に若者が多く来ることや空き家改修に少しの不安が挙げられたことから、先行事例にある集落活性化の解決策は必ずしも地域の方々のニーズに合わないのではないかと思います。そこで、学生がよそ者の視点を生かすのはもちろんのこと、これからも集落の方々と継続的に関わっていくことでニーズをくみ取り、地域にあった対策を考えていければと思います。

最後に今回の調査は、住民の皆さんが私たちを地域の行事に混ぜてくださったり、聞き取り調査に快く協力してくださったりしたおかげで成り立ったものだと思います。今後も、住民の方々との交流やつながり大切に、地域にかかわり続けたいと思うのでよろしくお願ひします。

白井綾乃

この一年間、一番心掛けたことは、とにかく参加することでした。目標は月1。

なぜならば、この調査の一番大切なことは現地の方との交流であるからです。現地調査をするのに、文献だけを当てにするのはおかしい。誰かの話を聞くよりも自分で体験する。百聞は一見に如かず。

そのおかげで、私は、だれよりも西会津に行くことができ、多くの方と仲良くなることができました。まだ、一年目ということもあり、全ての方と初めましてだったと思いますが、回数を重ねるごとに覚えてもらえたり、「実は前回、〇〇で来たんですよ」という話もすることができ、話のネタがどんどん増えました。

自分の中では、西会津は調査対象地ですが、それだけではなく、遊びに来ている感覚の方が大きいです。それがいいことなのかはわかりませんが、これだ

け知り合いが増えたことの大きな理由はやはりそこなのではないでしょうか。なぜ遊びに行くのか、遊びに行くと喜んでもらえるのもそうですが、何より、会いたいと思う人がそこにいるということだと思います。おじいちゃんおばあちゃんに会いに行くのと同じ感覚だと思っています。

今後の展開としては、今回の提案を活かすだけでなく、やはり、現地にどんどん溶け込めるよう引き続き参加したいです。

遊佐善智恵